

多様な学生の可能性を信じて



茂里 一紘
(広島工業大学長)

一 初めての「私」

本学の学長職について二年を経過した。本学へ移るにあたっては、私立大学の置かれている厳しい状況を承知はしていたが、他方でわが国の高等教育の七五%を担う私立大学の役割の重要性に対する認識もあった。先輩の先生に報告したら、「人生いたるところ青山ありだ」という励ましとも慰めともつかない言葉を戴いた。

三一年にわたる国立大学教員としての勤務の後の初めての「私」体験であった。同じ大学でありながら別世界のように思うことも少なくない。同じ言葉の意味する内容が異なる。

「授業料」もそのひとつであるがこはそれを論ずるところではなからう。いまひとつ大きな違いは「建学の精神」である。私が勤務した国立大学にもそれに近いものはあったが基本的に意味が違うというべきか。自らの志と自らの財によって設立されたのが私立大学であるから当然かもしれない。

広島工業大学の創設者である鶴^{つる}襄^{むらやま}が、父君の「教育は愛なり」という教えを建学の精神として、本学の前身である「広島高等電波学校」を設置して来年で五〇年となる。キャンパスは広島市の西端の山の斜面にへばりつくようにして広がっている。開学時は土地もなくお金もなかったと聞く。あったのは教育に対する高い志だけだったのである。

二 教育改革18

今、広島工業大学では教育改革に取り組んでいる。学園創立五〇周年に当たり、この機会に改めて建学の精神に立ち返り教職員の教育力を再結集しようということである。「教育改革18」と称している。「18」は平成一八年の「18」であるが、平成一八年度は新指導要領で学習してきた多様な学習歴を持つ学生を受け入れる年でもある。建学の精神の「教育は愛なり」の「愛」は「学生の可能性を信ずること」と理解している。したがって「教育改革18」は、多様な学生の可能性を信じて行う大学教育の新たな展開なのである。

ア 育成人材像

教育方針は学生にもわかりやすく、学生・教職員が共有し、日常の教育の中に反映されなければならない。本学の教育方針は「常に神と共に歩み、社会に奉仕する」である。「教育改革18」では、自然を畏敬し環境を重視する教育、そして高い倫理と社会とのかかわりを重視する教育と理解し、「社会と環境への思いやりと高い技術者倫理を持った広い意味での技術者」が本学の育成人材像であることを確認している。

イ 学習教育目標

育成する人材が備えるべき力として、中核技術者としての基礎知識とそれを応用する力、環境重視の認識と環境保全のために行動する力、そして高い技術者倫理とそれを実践する力を掲げている。これが本学の学習教

育目標である。基礎重視と応用、そして「社会・環境・倫理」がそのキーワードとなる。「社会・環境・倫理」はこれまでも暗黙裡に本学に存在していたものである。学風ともなっているが、改めて明確に確認した。

ウ 教育の基本的方針

学習教育目標に沿った学生の視点に立ったカリキュラムの提供を教育の基本的方針とする。学部教育では「基礎」を重視し、体系だった高度な専門的教育は大学院教育で行うことで、広島工業大学における技術系教育を完備するものとする。具体的には、基礎知識とその応用力を重視した技術者教育の展開、学生の多様性への対応と体験型学習の重視、自学自習態度の育成を意識した教育の実施とそのため環境整備を実行する。授業科目は同じであっても非伝統的な新しい学習教育内容・方法を導入する。

三 多様な学生の受け入れ

多様な学習歴を持つ学生の受け入れを前提として、教員は以下の認識を持って教育にあたることとしている。

ア 社会は多様な技術者を必要としており、本学はその任務を果たしているという認識。

イ 入学者の確保、退学者を出さないこと、高い就職率など大学の基本的任務をまっとうするためには教育の質的充実が必須であるという認識。

ウ 多様な学習歴を持つ学生の受け入れを前提とし、受け入れた時点での学生の学力と関心を出発点とする教育を実施するという認識。

また教育のあらゆる場面で学生の視点を基本とする。したがって「教員の資質」とは学生にとってよい教育をすることを意味することとし、学生の授業評価にもとづく教員の資質評価を始めた。教員は不断の自己研鑽によって自らの教育能力向上に努めるものとし、研鑽実績も評価対象とする。

特別推薦入学の学生を対象とした入学前教育や教育学習支援センターでの学生の個別学習への支援を既に行っているが、「教育改革18」では「受け入れた時点での学生の学力と関心を出発点とする教育」を正課授業においても実施しようとするものである。

『「教育改革18」の一〇の特長』のうちいくつかを記す。

① 教養教育

社会人としての素養の習得、基礎的スキルの習得および本学の教育方針のキーワードである「社会・環境・倫理」に関する学習の三本柱で教養教育を構成する。「社会・環境・倫理」の学習は専門教育と関連させて学ぶ。すなわち、一五週にわたる専門科目の授業の中で一コマをその専門に関連させて「社会・環境・倫理」について学ぶ。専門と教養の融合も目指す。また放送大学開設科目の履修によってより豊かな教養教育の実現をはかる。

② トラック制

学生の向学心と到達レベルの多様性に対応してトラック制を導入する。異なる学習目標のもとでの学習教育を実現するための履修形態である。学科内に「基本学習トラック」と「発展学習トラック」を設ける。「基本学習トラック」は当該分野の技術者として基本的な素養を身につけるためのプログラムで学科の基盤的教育内容を持つ。「発展学習トラック」は専門をより体系的かつ発展的に学びたいという学生の希望に応えるためのプログラムである。

③ 系

関連する二学科を束ねて「系」を設置する。系内の二学科は教育において連携・共同運用をする。これによって基礎重視の教育を実現する。系は学生の受け入れにおける多様性への対応でもある。受験生には学科志望とともに「系志望」を認め、系としても受け入れる。

④新しい学習教育内容・方法

学習教育の効果をより高めるため、従前と異なる非伝統的な新しい学習教育内容・方法もありとしている。「体験型学習」、技術的素養のための「動機づけ教育」、グループで物事を遂行する訓練としての「グループ学習」、「コミュニケーション学習」および「課題探求型学習」などがそれにあたる。これらを個々の授業の中で積極的に取り入れる。

⑤環境教育の重視

四 環境憲章

本学の環境学部は一九九三年に設置されたが、「環境学部」という名称を持つ学部としてはわが国最初のものである。これは創設者の「自然と人間の好ましい共存」という環境重視を具現化したものである。この精神は環境学部の学生に限るものではない。環境憲章を定め本学教育の基本としている。

環境憲章の前文では、「……広島工業大学は、自然と人間の好ましい共存を切に願ひ、人類が一丸となって自然環境の保全に邁進することが重要であると認識する。……広島工業大学で学んだ者は、いかなる分野で活躍する技術者であっても、自然本来の生態系を守るという原点を忘れない」とうたっている。そして以下の基本方針を掲げている。

- ア あらゆる機会をとらえて環境教育を実施し、いかなる分野であれ、環境を第一とする考えを身に付ける。
- イ 環境に関する新しい技術の開発と知見の蓄えに努める。
- ウ 環境を重視してキャンパスを構築・運用し、三宅キャンパスを最も優れた環境保全の実験空間とする。
- エ 環境保全のための目的・目標を設定して実施し、定期的に見直す。

オ 廃棄物の削減・リサイクルの推進、省エネルギー・資源に積極的に取り組み、環境負荷の低減と環境汚染の予防に努める。

カ 構成員の定期的研修を通じて、環境保全の意識向上に努める。

現在、環境週間を設け、「こみゼロの日」運動の展開、廃棄物の分別収集の徹底、全館禁煙の実施などをして
いるが、今後さらに活動を推進する。

五 むすび

教育方針の「社会に奉仕する」の「奉仕」すなわち「仕える」は、ギリシア語では「下に」という前置詞と「漕ぎ手」という名詞からなりたっていると聞いた。これは一技術者の勝手な推論であるが、その語源は、船の下甲板に据えられた多数の櫂によって航行するガレー船からきているのではなからうか。だとすると、「奉仕する」とは社会という船を漕ぎ動かすことである。本学が育成する人材は「社会の漕ぎ手たらん」という志を持つことになる。まさに本学の学風そのものである。

学長室のある一五階からの瀬戸内海の眺望は素晴らしい。近くに宮島の赤い鳥居が見える。冬の晴れた日には遠く四国の石槌山や佐田岬の山々の遠景が望める。眼下に広がる海を見ながら、山の斜面にキャンパスを作った先人の志を思うと現実の厳しい中にあっても鼓舞される。大学の建学の精神や教育方針に鼓舞されること、それは三二年目の「私」で初めて体験したことでもある。